

## 北海道スローフード宣言

### いのちの過程を大切にする有機農業



北海道庁赤レンガ庁舎前の有機農産物直売

北海道の農業は、規模拡大による大量生産・大量流通を進め、EUに匹敵する高い生産力を実現してきました。しかし一方、経済・社会のグローバル化の進展に伴い、我が国の食料自給率は低下、北海道においても食の画一化、伝統的食文化の喪失、地域の衰退といった負の側面が顕在化してきました。

こうした中で、あらためて食のあり方、食料生産と消費者との関係、食と地域の関係などを見つめ、ライフスタイルを問わないおそつと道内の食に携わる有識者による「スローフード&フェアトレード研究会」により2003年には「北海道スローフード宣言」が出されます。本シリーズでは、スローフードに関わる各種の取組みを紹介していきます。

#### 全国初の有機専門農協設立

7年前の2001年、JAS法の改正で有機農産物の表示が義務付けられたことと同時に、全国初の有機専門農協となる「北海道有機農業協同組合（以下「有機農協」）が設立されました。正組合員数57名（有機認定農家）、准組合員68名（消費者など）のとても小さな農協です。北海道で約300戸の有機認定農家の20%ほどを占める組織となっていて、北海道の有機農業推進の中心的な組織となることを目指しています。また、地産地消を目指しており、出荷量の80%以上が北海道向けとして取り扱われています。

#### 安全・安心だけでない有機農業

農薬・化学肥料を使用しないで生産された農産物が安全・安心であることは当然ですが、本質は「有機農業を営むこと」で、多くの生き

物を育み、共生し、大地を豊かに保ち、次世代に引き継ぐこと」にあります。ほかに、市場原理に任せず、農業生産に必要な再生産価格を自ら決めるので、安心して次年度も営農可能なこと、生産者、生産方法、流通過程までトレーサビリティ（追跡）が可能な顔の見える、農産物であることなどもあげられます。

また、現代の農業生産方法は約100年の歴史にしかならず、それ以前の伝統的な農業は有機農業が中心であったといっても過言ではなく、その意味でもスローフード運動の基本的な取組みの一つ「伝統的食文化の再生・維持」に、伝統的な農法である有機農業が大事な役割を果たすと考えています。

#### 有機農業の実践と有機農業者の想い

有機栽培では、バランスの取れた土づくりが重要で、堆肥などの投入が欠かせません。輪作体系を維持し、土壌診断なども活用、適度の除草（作物の生育を害しない程度とし、きれいに取り過ぎない）を心がけ、また、多品目を作付けし、農薬を使用しないことから、周辺環境も生物の多様性が確保されています。バランスの取れた土と生物の豊かな周辺環境が、病害虫に強く、生命力にあふれたおいしい作物を作り出しています。

有機農業は、農薬・化学肥料を使用しないことや、販売先を独自で開拓しなければならぬなど、労力とコストがかかる農業形態です。有機農家の中には、「差別化した農産物でもうけよう」と取り組んだ人もいます。しかし、多くの有機農家は、すべてを使い捨てる社会に育ち、その「つけ」を自らの肉体や子供たちそして未来に積み残していく永続不可

有機JAS認定農家戸数の年次別推移 (単位:戸、%)

区分	平成14年	15年	16年	17年
全国	3,670 (0.1)	4,501 (0.2)	4,742 (0.2)	4,636 (0.2)
北海道	199 (0.3)	289 (0.4)	295 (0.4)	331 (0.6)

資料：農林水産省「県別有機認定事業者数一覧」

注1：各年12月末現在の数値。ただし、14年は14年5月14日現在、15年は16年1月31日現在。

注2：( ) は、各年の総農家戸数に占める割合

有機農産物に対するイメージ (単位：%)

回答区分	回答率
安全・安心な農産物	77.7
健康によさそう	51.3
価格が高い	38.9
品質がよくおいしい	13.5
普通の農産物と変わらない	4.2
形や色が悪い	3.8
無回答	0.7

資料：北海道「平成18年度道民意識調査」

有機農産物の今後の利用 (単位：%)

回答区分	回答率
価格が低くなれば購入したい	56.3
購入できる場所が身近にあれば購入したい	34.5
今後も現在と同程度に購入したい	29.3
今後は量や種類を増やして購入したい	28.1
有機農産物の良さがわかれば購入したい	20.4
購入したくない	1.4
無回答	1.3

資料：北海道「平成18年度道民意識調査」



有機農協発送作業



有機農協の季節の野菜セット

能と思える社会に不安を持ち、近代農業にも限界を感じています。ですから、地球に求められ、社会に求められ、農地に、地域に豊かな循環をつくり、安全でおいしい食を創り出し、身体にも心にも社会にも喜ばれる「持続可能な仕組みである有機農業」に未来の可能性を見いだして取り組んでいます。

本年3月、北海道は「北海道有機農業推進計画」を策定、有機JAS認定農家※1戸数を平成17年度の331戸から同25年度には1300戸(目標)とすることをしています。

「いのち」の過程を大切に！

BSE(牛海綿状脳症)問題や中国の毒入り餃子事件、国内の相次ぐ食品偽装問題などは、「いのち」の過程をおざなりにした結果ではないでしょうか。経済を優先させて、命にかかわる食の安全性・信頼性まで失ってしまいます。みんなが安価で安定した食の提供を求めることで、食の画一化・均一化が進み、食品添加物、殺菌剤、防腐剤、ポストハーベス

共に支えあう関係を

ト※2などの使用が不可欠となり、原料農産物の農薬処理も必要となります。利益優先と顔の見えない関係性がモラルの崩壊を招き、結果的に自身や他者の命を傷つけて、地球環境を壊しているのではないのでしょうか。「生命は命(いのち)の循環によって成り立つ」という自明のことすら忘れられている今日、「いのち」の視点を回復させる力がいのちを育む農業にあります。「いのち」の過程を見つめなおし大切に作る農業が有機農業といえます。

自由競争が奨励され経済格差が広がり、人々が分断され、命の尊厳が失われていく時代こそ、共生・協調・循環など、お金で手に入らない豊かな命の循環が求められています。明るい未来を構築するための鍵は「共生力」にあるはず。農業も「競争力」ばかりが強調され、生き残りの議論が中心です。結果はどうでしょうか。国際競争では日本の農家が退席を求められているのが現状ですし、北海道も60年前は約25万戸近くあった農家が、現在約5万戸まで減り続けています。また、北海道農業の自給率は約200%といわれていますが、実態は大量生産・大量消費を支える低価格・均一化・画一化の農業が中心です。元々農業は経済合理性から最もかけ離れた存在です。このことに農家自身も、そして消費者も気づき始めています。営利目的の会社では単なる商品と客との関係になってしましますが、非営利団体である有機農協では、お互いの命と暮らしを共に支え合う組織を目指しています。有機農協の理念に賛同し准組合員に加入した消費者に向けて農産物を直接販売

売することを始めています。

競争から「協同」へ、可能性が広がる

こんな時代だからこそ、「いのち」の過程を大切にし、環境と人が共生できる有機農業を広め実践すべきときです。そのとき「競争力」でなく、「共生力」を発揮するには、自分たちの力と責任で、民主的に、平等で公平に連帯して物事を進めていく「非営利団体」である協同組合が社会を変える礎になると確信しています。競争でなく、共生を求める緩やかなネットワーク型社会の形成が協同組合で実現可能です。全国初の有機専門農協の設立は、有機農業者の集まりであるがゆえに必然でした。競争の中で抜きんでるためや、もうけるためだけに有機農業をしては、近代農業の陥った破たんの道を歩むだけです。

有機農協では、単なる売り買いの関係だけでなく、生産者と消費者が共に豊かに暮らしを支えあうために、理事7名のうち2名を消費者理事とし、消費者である准組合員を多く募集するなど、生活協同組合と農業協同組合が一体となったような産消混合型の協同組合を目指しています。

※1 有機JAS認定農家…JAS法に基づく有機認定を受けた生産農家。

※2 ポストハーベスト…収穫後の農産物に、防かび・防腐・発芽防止などのため、農薬を散布すること。

北海道有機農業協同組合代表理事

小路 健男

URL <http://www.yu-kinokyo.net>